
イン ザ ミネストローネ

セールス・マン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インザミネストローネ

【Nコード】

N4710K

【作者名】

セールス・マン

【あらすじ】

1951年のアトランティックシティ。コメディアンのリーとマーカスは、ようやく人気も軌道に乗ってきたばかり。けれどショービジネス界は思った以上に薄暗く、今日も二人はマフィアの親玉の昼食会にお呼ばれ。ところが待っていたのは拍手喝采ではなく銃弾の嵐?! コンビ崩壊の危機?! というかこんな危険な目に遭っても誰も助けてくれないなんて、俺たち以外と知名度低い!?

アクションを目指してみます。

1・下(下)しらせ

その立派な門構えにも関わらず、キナ・バーの楽屋はとにかく汚いことで有名だった。ショーガール専用の化粧室が乱雑なのは仕方がないとして、店の目玉のポスターに写真入で名前を公示されるような身分のものが通される場所も、まるでゴミ溜め、豚小屋田舎の教会。殆ど打ちっぱなしに近いコンクリートの室内はまるで手製の核シェルターのように、煤けて今にもフィラメントが切れそうな裸電球と、酔っ払ったトランペッターが頭突きを一つカマしたことでヒビが三つ入った鏡だけで精一杯。そこに人が二人、荷物を持って押し入るものなら、ゲロを吐く寸前の胃袋のように、ものが散らばり、ゴロゴロと音を立て、むっとした空気を更に淀ませる。

今日のスケッチ(コント)を口の中で復唱しながら入ってきたりーが眼にした光景は、そんな普段の様子よりもほんの少しマシだった。ぶら下がった光源を取り囲みながら揺れ続ける煙草の煙は、部屋の光景をより幻想的で、惨めに見せている。

トランクが開きっぱなしになっていない。服を無造作に着こなす事と乱雑に扱う事の違いを心得ている相棒は、スーツをきちんと畳んで、椅子の背凭れに引っ掛けている。傷だらけの床に靴下止めが転がっているのはこの際諦めよう。いや、諦めてはならない。出番まであと15分を切ったというのに、マーカスはまだタイを結ぶ事すらせず、バーボンのグラスを化粧台の上に戻しては取り上げるの動作を繰り返していた。

鏡台前を陣取る彼の肩を押し、リーは壊れながらも忠実に役目を果たそうとする鏡を覗き込んだ。きつく締めすぎた蝶ネクタイを少し緩め、汗ばんだ首筋を冷やす。アトランティックシティの6月は気味悪いほど温かい。先の戦争が終わってもう5年以上経つのに、人

々はただただ子作りに励み、若者は汗臭いTシャツの中で胸を張っている。何かがおかしいと思いつつも、リーには所詮、口を出す権利などない。乳飲み子がいるからという平凡な理由で兵役を忌避した彼が進む道には、仲間になり損ねた毛深い腕の海兵隊がうじゃうじゃいる。彼らに笑いという同情を得なければ、子供を大学に進ませることは出来ない。否、先ほど店内を覗いたとき眼にしたのは、いかつく上品なウイットを解さないマリーンではなく、髪を伸ばすことを許された伊達男のセーラーだったが、それがどうしたというのだ。兵士は居丈高に振舞いたがるとモーセが海を割ったときから決まっている。売笑婦を連れて一番前の席に陣取っていた白い制服を思い出した途端、どっと気が重くなった。昨夜はラジオ収録が長引いたせいで、結局3時間程度しか寝ていない。困惑はおんぶに抱っこ、気づけばすっかり仲良くなった。

「着替えたら？」

「ああ」

加えて、相方のこの始末だ。分かっている。同じだけ働いているのだから、疲れは同様に蓄積する。加えて本当はさして強くもない酒を手放さないと来ては。仕事には影響を及ぼさないものの、充血した眼は隠しようがない。

リーがカーネーションの花びらをむしっている間も、マークスは電柱のように突っ立ったまま、鏡台に広げたコミックブックへ眼を落としているだけだった。彼がそれを読んでいないことなど、部屋に入ったときから知っている。

「もうすぐ出番」

コマの中を縦横無尽に飛び回るヒーローの姿にちらと視線を落とすしてから、リーは再び分かりきった事を確認した。今度はもう、返事はなかった。代わりに彼の愛用するオーデロンとアルコールの匂いが、ワイシャツの肩から立ち上る。二つが混ざれば途端に親父臭くなる、なんて言えば本人が益々傷つくことが分かっているので、無視して汚い皿に載ったサンドイッチを掴む。

そう、マーカスは今、傷ついているのだ。舞台の上では余裕綽々、甘い声で歌を口ずさみ、飛び跳ねるリーに肩をすくめて見せる紳士が、ごつい肩に感傷をしょいこんで、本来の性質を曝け出している。つまりのところ本来のマーカス・ジョンストンとは、西部劇とコミック雑誌が好きで、酒と女を愛する自分を愛する、気弱で陽気な男なのだ。

それは、本来のリーが目玉をくりくりさせて調子っぱずれの声で叫び、ついでに滑ったり転んだり、クリームパイを投げつける大きな子供でないと同様、確かなことだった。だから苛立つてはならない。それに欠点を差し引いても、彼は十分「分類：いい男」に値する。

リーがコーンビーフ・サンドを食べ終わるまでに、マーカスはベルトを締めなおし、ワイシャツのボタンを一番上まで留めた。売れていない頃地元で賭けボクシングに出場していたせいで、カフ・リンクまで手を伸ばすと、白いワイシャツ姿は酷く窮屈そうに見える。俯きながら黒い繻子のタイを締めているマーカスは、電球に背を向けているせいもあってか、その彫の深い顔一杯に影を湛えていた。

「もう俺は駄目かな」

「そんなことないさ」

無感動な口調でリーは返した。今日の愚痴の原因はなんだろう。回りすぎたアルコールか、雑誌に載っていた批評か、それとも養育費を取る算段を始めた妻のことだろうか。

「あれだけ一杯ファンレターが来てるのに。ツアーも順調、ラジオの視聴率は右肩上がりだし、来年にはテレビかMGMか、って」

「そりゃ、お前はまだいいかもしれないさ」

意地汚くグラスを握り締めた右手と、ポマードでぎらつく髪を撫でる神経質な左手。『こいつ、オンナノコの前ではいつつもジン・トニックを頼んで左手はポケットの中なんだ。プラムを探してるんだって!』舞台の上でなら、茶化した裏声で叫べるのだが。

「まだ30前」

偽る事を必要としない今は、恨めしげな呟きに肩を竦めておくに限る。

「別に威張るほどのことじゃない」

「こっちはもう、あと5年で40の峠さ。親父が卒中を起こした年だ」

要するに、反応だけ見せておけばいい。気難しい観客を相手にしておくより、楽と言えば楽だ。この鬱屈に耐えられるならば。

涎かアルコールか定かでない液体で口角を濡らしたまま、マークスは頭から襟元へ手を滑らせた。太い指先がジャケットの襟を正す。大丈夫、しっかりしている。

「ダニーは？」

こうやって、本人が気遣ってると思っっている勘違いを表明する元気があるなら、十分舞台上で通用する。

「元気？」

「ああ」

空気の流れて自然とこちらに寄ってくる紫煙を手で払いのけ、リは頷いた。

「今朝は調子がよかった」

本当は顔すら見ていないが、円滑な会話のため嘘をつく。ちょっとだけ、笑うことすら出来た。せつかく深呼吸するため外へ出たのに、また息が苦しくなる。

自分で話の種をまいたにも関わらず、マークスはこちらを振り向くうともしなかった。ただ眠りに落ちる寸前のような深い溜息を一つ吐き、頷く。それでも、本人の中としては精一杯感情を込めているつもりなのだ。いつもバーでショーガールの顎を指先で持ち上げる時と同じ。

「大変だな」

使われる言葉は重苦しいものばかりなのに、責任感が全く感じられない。

「それこそ頑張らなくちゃ、だろ。治療費も払えやしな」

わざとらしく陽気な声を出せば、そうだな、と空洞になった明るい声。

「ご利用は計画的に、ってな。今から慰謝料を溜めとくのも、悪くないか」

裏返しで放置されていた懐中時計を掴む拍子に、グラスが倒れる。僅かに残っていたバーボンが傷だらけの天板をゆっくりと進み、最後に脱脂綿へと吸い込まれた。

光のせいで黄色く見える綿を、濃い飴色が染める。こんなに離れていれば揮発したアルコールの香りなど感じるはずもないのに、一瞬鼻の奥がひくついた。

喘息もちの息子、蔓延する軽々しい鬱、舞台から流れ出てくる二流のバンド演奏と野卑な笑い声。

信じられないくらい変てこで不快な匂いが、狭苦しい部屋を周回し続けている

「さあて、ミスタ・ジョンストン」

舞台のために取ってある甲高い猫なで声で、リーはマーカスへ顔を向けた。

ふと鎮まった笑い声。その間に押されて、部屋の空気が膨張した。コットンとトウモロコシと安っぽい化粧品の代わりを務めるそれは不快指数100パーセント。

「準備オーケー？」

鏡に押し付けた掌で、熱を追い出す。爪でヒビを追いかける。だがその間も、反対の手で弄ぶ丸裸となったカーネーションは、めまぐるしい速さで萎れていくのだ。

最後にマーカスはほろ酔いの穏やかな目つきを細め、相棒が今にも引き剥がさんと力む水銀の中に、いとも自然な笑みを映す。ご立派大統領の前に出しても恥ずかしくない。

「腹が減ったけど、ヒケてからでいいさ」

もう一度カフボタンに指で触れたときも、その表情が崩れることは無い。そして驚くべきことに、いや、期待していた通り、今晚

初めて積極的にリーの眼を覗き込んだときも。

「今夜は馬鹿に張り詰めてるんだな」

投げかけられた視線は一瞬でそらされる。けれどそれは、鼓膜の手前で膨張し、音を阻害していた不埒な泡をはじけさせるには十分すぎる刺激だった。

「まあね」

拍手の音は落下し地面で跳ねる焼夷弾と言ったところ。加えてマーカスが分厚いガラスの灰皿へ差しつ放しだった瀕死の煙草をつまみ上げ、強く押し潰したからたちが悪い。馬糞臭い焦げた匂いが益々強まり、白い煙は女性のオルガスムスのように細く長く、ヤニだらけの天井に頭をぶつけた。

ふつつと息を吐き、リーは気まずげに笑いながら眉間へと皺を寄せた。いつの間にか前歯で噛みほぐしていたカーネーションの茎にマーカスの視線が定まらぬうちに、ボタンホールへ品よく収めてしまふ。先ほどちぎって捨てた無数の花卉は足元に散らばったままで、踏みまじれば生きていたもの特有の水つばさを踵に伝えた。

「でもそれがどうしたって言うんだ？」

古びたドアを引き開け、ふざけたポーズで深々と会釈すれば、同じく芝居がかったウインクが返ってくる。

「違うない」

扉をくぐったときにはもう、マーカスは何も怖くないといった顔で軽く身震いをし、リーの方も口笛を吹きそうな気軽さを身体中から発散させていた。

薄暗い通路を早足で駆け抜ける最中に、今まで春の風のような爽やかな歌声をクラブ一杯に響かせていた美人姉妹とすれ違う。唇をすぼめた姉の肩にさりげなく触れたマーカスよりも一歩先に、いたずら小僧の笑顔で舞台に飛び出すのがリーの役目だった。

自称火を吹くトランペッターが顔を顰めたのを軽やかに無視し、リーはわざと司会者が紹介を始める前に客席へ転がり出た。まだ支払いの終わっていないタキシードが汚れることなどお構いなしで、

市松模様の床を派手にヘッドスライディング。どつと上がる笑い声、セーラー服は思ったよりも後ろのほうにいた。

悠然とした足取りで近付いてきたマーカスに襟首を掴んで引き上げられている最中に、役目を奪われ一瞬言葉を失った司会者は、怒りに引き攣った唇を動かすことすら出来ない。これが最高の瞬間なのだ。上手い酒と料理と葉巻と、観客の喝采に匹敵する、晴れ晴れとした気持ち。今まで悩んでいたこと全てが馬鹿のように思える。

マーカスがリーの頬を抓る段になってようやく、このクラブの支配人である男は無理やり笑顔を作った。追い討ちをかけるよう、リーは相棒と共に観客へ取り澄ました微笑を投げかけた。拍手に次ぐ拍手、熱気が包み込む。爆心地はここで、被爆して天国まで吹っ飛ぶのは素敵なファンたち。ひねた後遺症を引きずるのは司会者の甲高い声のみである。

「それではご紹介します、ラジオ『アフターアワーズ・コメディ』でも御馴染み、リー・デネットとマーカス・ジョンストン！」

2・トマト（売り切れ）

晴れと晴れの隙間の気鬱。傘はいらない。雨の代わりに流れてくるのはラジオ放送で後部座席の足元に溜まるのは乾いた砂利。

ペンシルヴァニア・アベニューを挟み込んだ安っぽいホテルの上で、鈍色の雲が飛ぶ。時おりなっていない舗装に足を取られて飛び跳ねる以外は、まるでコマ回しのような世界の慣習に従って、タクシーはすうつと通りの間を抜けていった。昼前だというのにまだごみ箱へ寄りかかっている無様な酔っ払いが、吐瀉物のこびりついた口を脱ぎ捨てたジャケットで拭う。すれ違うとき顔を覗き込めば、相手は開きかけた蛤のような眼を向けた。芯ちぶれたもの特有の、剣呑な色に芯までどっぶり染まっている。自らとは全く違うことに安心し、リーは満足して顔を戻した。

「おい、消せとは言わないから違う局に変えてくれよ」

類杖をついたまま窓の外を眺めていたマーカスが、掠れた声を上げた。昨晚シヨーが引けた後、ぬいぐるみを抱きしめる幼児の如く、手にしたグラスを片時も放さなかったツケはきちんとまわってきている。尤も体力と気力は十分のようで、横目で眺めるリーの顔に小さく鼻を鳴らすことも出来た。

この都市限定でそこそこ有名な二人組の意見を尊重し、ドライバーは前を向いたままスイッチに手を伸ばした。ぷつんと気短な音と共に、フランク・シナトラの新曲がボンネットの奥でむずかるエンジンに飲み込まれる。

「シナトラを拝んだ女学生は、例外なくヒステリーを起こして卒倒するらしいぜ？ 凄いと思わないか？」

余りにも平坦すぎるため疑問符が抜けて聞こえるほどの口調で、マーカスは言った。

「フー・マンチューもびっくりだ。是非とも、その魔術のご相伴に預かりたいもんだね」

「全員サクラだつて話じゃないか」

フロントガラスの向こうを漠然と視界に映しながらリーは返した。

「凄腕のエージェントがいるんだな」

かけてやる言葉は知ってるし、それを本音として言うことができるけれど馬鹿らしくて、口を噤んでしまった。幾ら真摯な態度で接しても、疑心暗鬼のループが待ち受けているようでは。

珍しく沈黙を真つ当に受け取り、マーカスは首を振った。

「いや、俺がなりたいのは女学生のほうさ」

自分で言いながら既ににやついている。それが少し悔しい、先に笑おうと思つたのに。

「いいな。それ、コロンボに言つてやれよ。彼も絶対そう思つてる」
自分で言つてがっかりする。30分遅れてくるであろう鷹揚なパトロンの顔は、出来るなら顔を合わせるまで思い出したくなかったのに。マーカスと会うまで、リーは演技もしていないのに賑やかなイタリアーノという人種を、お世辞にも好きということが出来なかった。

「だらうな」

一方のマーカスは同郷のよしみを信じているのか血潮に流れる楽天主義のせいか、段違いにリラックスして鳩のように喉の奥を鳴らしている。

「ミスタ・コロンボはこの前の娘の結婚式、嫁入り道具に金が掛からなけりゃ、俺達じゃなくて奴を呼ぶつもりだつたらしいからな」

「呼ばなくて正解だよ。Stunator（失神のシナトラ）なんか連れてきて花嫁が気絶したら洒落にならない」

「既にもう、コルセットを締め上げすぎて顔を真つ赤にしてたじゃないか。可愛いお嬢さんは」

春の日差しに透き通る白いレースのガウンを思い出したのだろう。マーカスは静かに微笑んだ。

「よいマードレ（母親）になれるよ。あのヒップだつたらね。女はそれが一番大事だつて、うちのお袋も言つてたし、エル・ディゴ（

イタリア人)なら大概賛同するだろうな。おたくのところでは、そういうの無い?」

「女は貞淑で料理が上手くて夫に口答えしない。余裕があつて、なおかつ伴侶に不満があるならシナゴークに行つて愚痴つてもよろしい」

鏡に映したかのように自嘲をそのまま反射させ、笑みの形に開いた唇から齒を零す。

「それだけ。簡単だろ?」

お互いまだまだシナトラにはなれそうに無かつた。既に伝説となつている傍若無人な振舞いなど到底真似できず、小遣いと次の契約を貰いにパトロンへ会いに行く。バベルの塔並にうず高いケーキ、祖母から伝わる由緒あるウエディングドレス、参加者に振舞われるご馳走と横一列に並び、主催者の自尊心を満足させるためだけに結婚式へ呼び出される。

「結構なことじゃないか」

顎を人差し指で叩きながら、マーカスは間延びした声を出した。

「そういう意味じゃ、俺達は似てる」

「一緒にしないで欲しいね」

「何が嫌いだ。パスタか? 赤ワインか? いや、これはお前も飲んでるか。それとも」

うっかり飛び出しそうになった声を舌が引き戻し、唇はエムの形で固まる。無かつたことにしようなんて甘い考えは許さず、リーは意地悪く眉を吊り上げた。

「マフ?」

「いや、そうじゃない。コーザ・ノストラだと言いたかつただけで要するにコロンボみたいな奴だろう?」

「みたいとはなんだ、まさしくそのものじゃあないか」

相手が自分を含む誰かの唸り声で溜飲を下げることを知りつつも、マーカスはタールのせいで干上がった喉から息を吐き出す。

「知ってるくせに」

「確かに好きじゃない」

「ああ、分かったぞ。何て奴だ」

そしてリーがにやけたままでいると、酒焼けした顔をくしゃくしゃにして、お手上げだと言わんばかりに両肩を持ち上げる。

「さてはおまえ、俺のことが嫌いなんだな」

とうとう我慢できなくなり声高に笑ってやれば、バックミラーに映った顔は本気で呆れ返っていた。

「俺はイタリアーノは嫌いだけど」

勝手に細まってしまふ尻を野放しにしたまま、シートに身を投げ出す。女にもやってみせたことが無いような流し目を一発くれてやっつてから、リーは顎を軽く持ち上げた。

「お前のことは好きだよ。そんなことも知らなかったのか」

「ああ、知らなかった」

マーカスは苦笑いを浮かべ、再び頼杖を復活させてしまふ。この話は終わりだと言わんばかりに。

タクシーは角を曲がり、大通りへ合流する。平日ということもあって、車は大分まばらだった。時間よりも早く、目的地へ到着しそ
うだ。

「コロンボが嫌い？」

マーカスが再び口を開いたのは、4つ目の信号がようやく彼らの行く手を阻む気を起こした後だった。

「いい奴なのに」

「心配しなくても、顔を合わせたからって卒倒しないさ」

相方に倣って、リーも赤い光に横目を送る。昼食を取りに向かう歩道のオフィスワーカーたちが、正面を向いたまま颯爽と彼らを追い抜いていく。待ち時間のあいだ、リーは膝丈のスカートから覗いたよく動く脚を眼で追いかけていた。ほんの時々正夢になる、詮無き妄想。気まぐれで車内を覗き込んだタイプストが黄色い声を上げる。「マーカスとリーよ！ ほら、『アフターアワーズ・コメディ』に出てる」叫びが、急速に空気を粟立たせる。持続しているうちに、

ちやほやへ慣れない新参者は猿のように歯を剥いて握手し、サインを書き付けていく。

分かつてはいることだが、幾ら耳を澄ましても腹に響くのは聞きなれている低いエンジンの唸りだけだった。

「クワッス 気品がないのは認めるがね。だがそれは仕方ない」

そしてついでの如く紛れ込んできたマーカスの言葉。

信号が青になる。先ほど注目していた脚は、高速で通り過ぎる瞬間見れば、思ったよりも大根だった。

「許してやれよ」

「致命的さ。大体ジョー・アドニス之又従弟っていうのも怪しいし」
「鼻と顎がそっくりじゃないか」

「けどそれにしたって……そう、信じられないくらい軽率だしな。大体、シヨービジネスが好きって時点で胡散臭い。バグジー・シージェルはビバリーヒルズで死んだ」

ぶるりと震えたのは、実のところ本心からなのだ。ミスタ・コロンボはその血統を最大限に利用して、アトランティックシティに幾つかのクラブを持ち、ハリウッドに出入りしている。ニューヨークとニュージャージーの闇賭場に関する事なら誰にも負けないし、2メートル近い身長の下が5人くらい、いつでもどこでもアヒルの子のように彼の後をついて回っているから、本人の姿が見えなくとも絶対居場所を見失うことは無い。指に巨大なダイヤモンドのついたリング、用いるのは純金製のシガーケースからライター、そして書類鞆へは無造作に押し込まれた札束。お近づきになるにはもってこいの人物だ。これから灰色の領域で上手く波に乗りたいと思っているのなら。

「けどあの狎みたいな顔、ぞっとする」

「ペキニーズくらいの愛嬌はあるぞ」

「造作のことじゃない」

唇を尖らせれば、マーカスは無言で続きを促した。

「危うさを感じるんだ。まさしくバグジーにもあつたし、ジーン・ハローウとかルフドルフ・バレンティノ」

「狎とハローウを同じにするなんて、失礼すぎやしないか」

「まぜっかえすなよ」

もどかしさに親指の爪を噛んだせいで、昨日の朝やすりで磨いた努力は台無しになってしまふ。

マーカスの危機管理意識はこの街の信号機くらい役に立たない。呑気なのか酒で鈍っているのか、はたまたあえて鈍らせているのかは分からないものの、ギャグを考えるのと第六感を働かすのは常々りの役目だった。

「どう考えても奴はまずいぜ」

いまいち話を飲み込めないでいるマーカスへ、たつぷりと含ませた諦観を投げつけるのも馬鹿らしい。代わりに前へ割り込んできた紫のクーペを睨みつけることで我慢する。

「あいつにくつついてたら、俺達もヤバいってことさ」

「だからって、この街にいる限り彼と縁を切るのは」

「そろそろ河岸を変えても良いんじゃないかと思う」

早口で滑らせることに慣れた唇はその続きを紡ごうとするが、隣でゆったりと腰を据える慈愛深い目つきを意識した途端、丸まって固まる。自分達のギャグくらいお決まりのパターン。リーが興奮するたびに、マーカスはここぞとばかり年長者の風格を前面に押し出す。リングで食らった強烈なブローが残っていた薄い一文字傷跡は、彼が唇を曲げるたびに鼻の下で山形に持ち上がり、まるで肩を竦めているように見えた。実際、そうなのだろう。ほんの少し眇められた臉の奥で、茶色の瞳が雄弁に語っている。

「俺は本気だぜ」

だが今回、リーはいつものように再び爪を噛み始めたり、大仰なジョークでお茶を濁そうとはしなかった。必死に踏ん張り、ひたと眼を合わせることで相手が視線を逸らすのを期待する。

「シナトラが出世したのは詐欺師のマネージャーと踏み台にするた

めの人気楽団を持ってたおかげじゃない。シカゴに行ったからさ。奴がこの州に燻ってたら、今でも俺達とクラブの席次争いをしてたかも」

妻は親戚のいる生まれ故郷を離れたがらないし、子供の喘息にはアトランティック・シティの温暖な気候は打ってつけたと医者も言っていた。問題は、リー本人がこの街を嫌っているということである。気がつけば破って無茶苦茶にしまいかねないほど、窮屈になっている。

「ムーニー・ジアンカーナだっけ？ アル・カポネの跡継ぎ。シナトラとよく飯を食ってるって」

「そうだったな」

かまとどぶつた口ぶりで首を傾げながら、マーカスは眼だけを運転手の方に向けていた。

「そうだよ。奴はシヨーが好きだ」

もうここまで言ってしまうえば、腹を括って続けることが出来る。

「今行けば、奴はきつと手放して出迎えてくれる。そうすればMGは取ったも同然だ。来年の夏にはきつと、お前の尊敬してるビング・クロスビーにだって会えるよ」

保険会社のビルディングを左折。見知った場所は近付き、そして離れていく。待ち合わせのレストランはもうすぐだった。短くなっていく時間を言い訳にし、リーは今度こそ感情を止めることなく語調を早めていった。

「こんなところでドサ回りを続けるのは嫌だ。シカゴに行こうぜ。」

嫁さんが鬱陶しいなら置いていけばいい」

「けど、子供もいるしね」

「俺にだっている。いずれは迎えに行くけれど、しばらくは残してくつもりだ。ここの空気はいいからな」

空気中に広がった夢は、締め切った車内一杯を跳ね回る。もう大根脚の気を惹こうと躍起になる必要もない。いつでもどこでもファンが追いかけてくる。映画の撮影所に置かれる、背凭れに名前を刻

み込んだ椅子。テレビカメラに向かって笑顔を　　思いつきりレンズに顔を近づけて言ってる。「フォーカス合わせるの、大変だね！」　　いや、笑うのは自分ではなくクラブの数十人でもない。世界中が笑う。大統領だって笑わせてやる自信がある。機会さえ掴むことができれば。

「怖いもの知らずだな」

そんな夢を、マーカスはおもむろに口を開くことで、簡単に停止させる。

「自信があつて。いいことだと思うよ」

煙草を肺から押し出すのと同じ吐息で続けられた言葉に、高められた感情は一気に臨界点まで達する。普段なら平気で押さえ込むことの出来る感情に突き上げられ、知らずとリーは声を荒げていた。

「なんでそんな言い方。俺は真剣に考えてるんだ」

「分かってる」

「いや、分かっちゃいない。このままだったら」

このままだったら、あと4ヶ月すれば25になる。そのうち飽きられるかもしれない。

本当はそんなことを考えていたのではなかったのに、リーはそれしか口に出すことが出来なかった。マーカスの眼を見ることが、苦痛だった。

「渋る必要なんかないさ。行きたくない？　スターになりたくない？」

吐き捨ててしまえば綺麗さっぱり忘れられた言葉は、口の中で絡まって粘つく。

「そんなこと、あるわけない。だろ？」

速度メーターばかり見つめているしかない間、リーはやるせなさで押しつぶされないよう精一杯組んだ指に力を込めていた。

「いつも思ってたが」

溜まりに溜まった間を、マーカスの柔らかいバリトンが押しつけてくれる。肩から漂うトワレの匂いは、今日はまだアルコールと混

じつておらず、あくまでも生真面目だった。久しく忘れていた香りだ。素面のマーカスという言葉は、戦場に行かない海兵隊くらい希少価値になりつつある。

「お前、まるでピーターパンみたいだね。そのうち空だって飛べるんじゃないか」

「かもな」

気がつけば車は停まっている。見慣れたテラスが正面に聳えているにも関わらず、運転手は到着の一声すらかけようとしない。捨て鉢の呈で、リーは吐き出すように言い放った。

「俺が飛んでいったらどうする」

本当のことを言えば、リーは空を飛ぶことと言えば飛行機ですら忌み嫌っていた。けれど、スターになれば世界中を駆け巡る。空を飛ぶときはやってくるかもしれない。一人でどこまでも飛ばなければならぬかもしれない。そして恐らく、自分は飛んでしまう。墜落する可能性など考えもせず。

「どうしようもないよ」

それなのにマーカスは怒るでもなく驚くでもなく、窓から差し込む光へ眩しげに眼を細めた。言葉の穏やかさに、泣きそうになる。

「ティンカーベルの魔法の粉でもない限り」

「じゃあ虫取り網でも振り回しな。簡単に引つかかるよ」

耐えられなかった。決まり悪げにだんまりを続ける運転手へ礼をおしつけ、乱暴にドアを開け放つ。待ち人が来るまで中に居座るらしいマーカスは動かなかった。また怒りが膨らみ、声だけで威圧する。

「先の中で飲んで。おまえは？」

一番確実で卑怯な含みを持ち出せば、マーカスも承知で乗ってくる。またいつものように肩を竦めているのだろう。

「付き合おう」

衣擦れの音と共に、恐らく今日最後になるであろう、まともなトワレの匂いが鼻を擽った。

招待者が行き着けるこのレストラン『ヴァニリッツァ』は観光ガイドに名前が載るような派手さと料理を提供しているわけではないが、ラビオリをつつきながら下衆な声を上げて笑ったり煙草をふかしたりする分にはちょうどいい店だった。ニューヨークを牛耳っているならず者達が、地元には散らばった子分に誘われてその席へ座ったことも度々という。昼時の一番混雑する時間に、ウインドウから覗くテーブルが余り埋まっていなくても関わらず、店が潤っているのはそのためだった。

「しまった」

背後から聞こえた呟きに、リーは一応振り向いた。

「財布を忘れたなら、心配しなくても勘定は向こう持ちだぜ」

「そりゃ知ってる。ライター、置いてきたらしい」

胸ポケットに差し込んだ手を乱暴に動かしているマーカスは、過剰なほど不安げな表情を浮かべていた。

「ライター？」

「コロンボに貰った」

「ああ。ほっとけよ、あんなの」

趣味の悪い金ぴか、「親愛なる」だとか「友情の証」だとか、オペラのようにくどい台詞が刻まれたそれと同じものを、リーも以前楽屋を訪れたコロンボから受け取っていた。いつか金に困ったとき質入したら、かなりの値段になりそうだと見込んだから、家においてある。そうでなければ、あんな胸糞悪いもの、真っ先にゴミ箱へ放り込んでいるところだ。

「タクシーに忘れたのかな」「お前、家を出てから一本も吸ってないじゃないか」

血相を変えて踵を返そうとするマーカスの肘を掴み、リーは眉を顰めた。

「家で大切に崇め奉ってるって言うっておけばいいさ」

「それならいいが、もし落としたなら大変だ」

「たかがライターくらいで」

「たかがライターでも、相手が悪い」

振りほどこうと腕を引く動きは本気のものだった。こんなにも真面目になれるのかと驚くほど必死の形相で、走り出そうとするタクシーに手を振っている。何故この真剣さを普段持ち出さないのか。明らかに嫌悪感を表すリーを、マーカスは軽い苛立ちを込めて見下ろした。

「あのな、さつきお前が言ってたジアンカーナとシナトラの話だ。シナトラはジアンカーナに、崇拜の証として胡桃ほどの大きさのサファイアがついたリングを渡したんだ。奴は喜んでそれを嵌めてたんだが、ある日当の本人と会う日に、たまたまそれを家に置いてきこまった。そうしたらシナトラはどうしたと思う。ラウンジのど真ん中で人目憚ることなく、おいおい手放して泣き出したんだぜ」

二人はお互い、まるで自分の前でシナトラが泣き出したかのような表情で見詰め合った。

「それよりも恐ろしいことは、ジアンカーナがその場でペコペコ頭を下げて奴に謝ったってことだ。シカゴを牛耳ってる男ですらも、人前でそんな恥をかかなきゃならない。これが俺達だったら、三日後には下げる頭すら残っちゃいないかも」

眼の前にいるのは愛すべき相棒ではなく、彼の皮を剥いで上から被っている異星人ではないか。リーは一瞬だが本気で思ってしまった。対してマーカスは半ば懇願するような面持ちで、自らの腕に引っかかったリーの手を掴む。

「お前にまで右向け右をしるとは言わない。けれど俺は、例えタクシーが爆発しようとも店が火事になろうとも、コロンボの前ではあのライターを使って煙草を吸わなくちゃ」

甲高い金属音を一つ立て、乗客をすげなく無視していたタクシーは50メートルほど先、レストランの角を曲がろうとしたところでようやく停止した。溜息を一つついてから、マーカスは勢いよく手を離れた。

「お分かり？」

「分かりたくもない」

まだ力んだ指の感触が残る手をポケットに突っ込み、リーは首を振った。

「大袈裟にも程が」

普段から甲高い上に大きすぎると嫌っていた自らの声は、耳を聳する轟音で真後ろに吹き飛ばされた。他に飛ぶ羽目となったのは、例えばイエローキャブがある。一瞬とはいえ、その安っぽい黄色は50センチ近く地面から浮いた。すぐさま空気の減ったタイヤはアスファルトへ叩きつけられ撓んだが、それでもルーフから車内のシートに至るまで、ありとあらゆる部分へ火の手がまわる時間は十分過ぎるほどあった。全てのウィンドウが粉々に砕け車体を覆った後、一拍遅れて落下し、白い光と煙を映しこんだまま地へばら撒かれる。こういうときだけ、子供のようなギョロ目も役に立つ。一瞬の出来事を、リーは見開いたまなこで細部に至るまでしつかりと捉えてしまった。背後という位置、そしてもうもつと上がる灰色の塵埃のおかげで、ドライバーの姿を見届けることはできなかったが、これはむしろ幸いともいえる。ただでも真正面から押し付けられた熱風へ無防備に身を晒し、肉体はおるか理性の根底をも揺さぶりをかけられていたのだ。そんなものを網膜に焼き付けてしまったら最後、少なくとも夜眠れなくなった拳句、母親の姿を求め泣き叫ぶなんて生易しいことでは、到底済まない。

ちくちくと顔を刺す砂粒を今になって感じながら、リーはショットしてしまった頭の空白に、今眼の前で起こっていること　煙を噴き上げる車、叫び、逃げ惑う人々　を中継していた。

直接体内にねじ込まれた音と熱が、聴覚を抑圧している。だからマーカスが何を言ったのかは分からない。取られた手首が引っ張られていることを自覚したのは、真下に吸い付いていたかのような足が一步、二歩と地面を滑った、その感触だった。

「まずいぞ」

耳の奥へ滑りこんできた自慢のバリトンは形無し、情けないほど

ひっくり返っている。

「よく分らんが、とにかくまずい」 最後に振り返れば、なぎ倒された観葉植物の植木鉢、レストランのウインドウも既に無く、その向こう側はしっかり確かめるのもおぞましい。ひっくり返ったテーブルの向こうからだらりと伸びているのは人間の腕だろうか。

全てを視界から消し、なかったことにしてしまいたくて、リーは恐慌をきたした人々の群れへ飛び込んだ。人いきれが焦げ臭さを消してくれたものの、眼に映るものと思いを接続することはまだ上手くできなかった。押しやられるまま、どことも分らない場所に流されていく。

「リー！」

派手な女物の帽子の向こうで、背伸びをしたマーカスが叫ぶ。

「エセルのところへ！」

訳も分からず何度も頷く。それを見届ける間もなく、マーカスの姿は人の渦に飲み込まれていった。そのことに恐怖を覚えた瞬間、リーはようやく遠くへ去りかけていた自分を取り戻すことができた。「エセルだな！」

見えない相手へ喚きながら、殺到する身体を押しつける。足を踏まれ、スーツのボタンが引つかかったが、全て振り切った。

それから先は無我夢中で、もくもくと足を動かし続けることだけに集中した。立ち止まったら二度と動けなくなる。そうやってはいけないと、普段から信頼を置いている第六感がはつきり告げていた。結局リーが自らの膝の震えと、恐怖が明確な形となることを許したのは、まだ危険を知らないテネシー通りのど真ん中、美しい女学生たちが笑いさざめくのを眼にしてからのことだった。

3・にんじん

妻でも家族でもない女の部屋というのは、不思議な匂いがする。

ドアを開ければ新鮮さを感じ、一步踏み込めば疎外されていることをはつきりと知るはめになる。特にエセルは客人が来るたび、部屋中にムスクの香水を撒き散らすので、その違和感はひとしおのものだった。そこにどう馴染むかが男として腕の見せ所、マーカスなど上手いもので、君はS極僕はN極という言葉を全く疑うことなく、滑らかに、しかし全く気後れすることなく、いつのまにか女主人の脚を撫でている。

いや、今回彼の手が潜り込んでいるのは、ストッキングではなくブラウスの奥だった。どたばたと荒っぽい足音を立ててリーが部屋へ踏み込んでも、行為が中断されることはない。古ぼけたソファに並んで腰かけ、眠たげな顔で煙草をふかしては時おり頷くエセル。そして身を寄せるマーカスは、彼女の耳に囁きを流す唇と、左側の乳房の辺りで不埒な動きを見せる掌の動きを一切止めようとしない。どちらか二人だけの世界に浸りきって戻ってくる気は更々無いらしい。

自分でも理不尽なことだとは分かっていたが、それを眺めるリーには、強烈な罪悪感に駆られることしか道は残されていなかった。

「何ぼさつとしてるんだ。こっち来いよ」

エセルの栗毛を唇で食んだまま、マーカスは疲弊した眼でソファを示した。

「落ち着かない」

「落ち着かないのはこっちだ」

リーの知るマーカスとは、アブノーマルなセックスに対する好みはおろか、自分のように言い寄る女を見つけたらすぐさま寝室に行こう、バスルームに行こうと騒ぐような乱暴さすら持ち合わせていない、模範的紳士であったはずだ。

どちらにしろエセルにとつては可愛らしい年下の男に見えるようで、二人が彼女のアパートに呼ばれる頻度はそれほど差がない。3年前にクラブの経営者だった夫と離婚して以来、エセルは慰謝料と趣味に近い仕立物の仕事だけで、ぬくぬくと暮らしていた。

「貴方なら無事に帰ってくると思つてたわ」

40目前とは思えない凜々しさの溢れた声で、エセルはリーを絡めとつて仲間に加えられた。

「むしろマークのほうが……ううん、そうでもないわね。彼も十分あつかましいわ」

彼女の部屋は、壁に一枚東洋の版画が掛かっている以外は、殺風景といつてもいいほど物がなかった。今彼らが腰掛けるソファには大きな洗いざらしの麻布がかけられており、いつ部屋の主が消えてもおかしくないような空虚さを感じる。そこに彼女は3年間居座り続けているわけだが、そつけなさはいつまで経つても消えなかった。「いい加減、マッサージは止めて話を」「いやいや、マッサージも大事だぞ。それに、これは彼女の提案なんだ」

マーカスが浮かべる微笑は、どう考えても自然なものとは思えなかった。

「男は不安があると母性に頼りたくなるもんだ、お前なんかそこらへん、よく知つてるだろうに」

「だからつてさ」

「私は子供を産んでませんけどね」

煙草をテーブルの上の灰皿に放り込み、エセルも頷いた。

「昔から、包容力だけはあるつてというのが定評なのよ。前の夫だつて、経営が思わしくないと私の乳首を吸つてたわ」

「お前も借りたらいい、話はそれからだ」

熱心な4つの眼に唆され、リーも半信半疑ながら熟れたりんごのようにふくよかな右胸へ手を伸ばした。春も終わりがけて空気は暖かいという言葉を通り越しているというのに、自分の指がちららの

ように冷えていたことを初めて知る。乳房を持ち上げるようにして手をブラウスの合わせ目から潜り込ませれば、ブラジャーの上からでも人の体温は如実に伝わってきた。しっとりとしたそれは、確かに温かい。触れ合ったところから、凍り付いていた全てが溶けていくようだった。

「ほらね、キッド」

ばちばちと瞬きをして、思った以上の効果を持つやわらかさに困惑している、性的な匂いの全くしない笑いを漏らしながら、エセルはいつも用いる渾名をリーの耳に吹き込んだ。

「落ち着くでしょう？」

何と答えて良いか分からぬまま、リーはとりあえず、まさぐる手の動きへ没頭することにした。

「前々から、もしかしたらとは思ってたんだけどな」

コーヒーが運ばれてきて以来、マーカスは落ち着き無く窓際をうろついていた。抱えられたコーヒーカップの中身は殆ど飲み干されてしまい、その埋め合わせをする温めたブランデーがこちらにまで香る。

「ガキの頃、故郷のオハイオで似たようなことがあった。ダンスンって奴がいて、町の生肉業者をまとめてたんだが、あるとき新参者が入ってきた。そいつは愛想も要領もよかったもんだから、何人かはあっけなく引き抜かれる。そうしたらダンスンは、まず最初にその新参者じゃなく、そいつと一番大きな取引をした奴を、冷凍庫に閉じ込めて氷付けにしちまったんだ」

「そりゃ裏切ったそいつが悪いんじゃないか」

部屋に来てから3本目の煙草に噛み付き、リーはソファの背凭れに頭を預けた。

「俺達は今までコロソバ一筋だったし、それに、第一」

ためらいは煙の輪となって、先に口の外へ飛び出す。

「こんなペーパーを」

「どれだけ稼がせてやってるかなんて関係ないさ」

付けっぱなしになったラジオの向こうでは石鹼のコマーシャル、株式のニュース。そして2回目の、信じたくないニュース。『今日の昼頃、サウス・ステーツ・アベニューにて銃撃事件があり、タクシーの運転手とレストラン「ヴァニリツア」の客を含む3人が死亡、また、腹部を撃たれて重症と報道されていたジム・コロンボ56歳は、搬送先の病院で死亡したことが明らかに』

「もつと楽天的な見方は、ただ単に巻き添えを食らった、ってことだが」

カーテンを捲る手つきもどこか威勢が無い。日は暮れ初め、眼下の通りは仕事から帰る人間と向かう人間が闊歩している。装いは様々だが、その瞳には一様に疲弊感が浮かんでいる。負けず劣らずくたびれた表情を、マーカスは再び彼らのつむじに注いだ。

「コロンボが殺られたってことは」

「そつちの線？」

どれだけ希望を込めて尋ねても、頷きは返ってこない。何度聞いたか分からないキャンデイのコマーシャルにいい加減堪忍袋の緒が切れそう、リーは叩きつけるようにラジオのスイッチを切った。

結局、入れ替わりにバスルームから聞こえる呑気な鼻歌が、余計張り詰めた神経をかき鳴らすだけの結果に終わった。バスタブに湯が溜まるまでの時間と、ラディツシュを丸ごと入れたサラダが完成するまでの時間は等しかった。彼女の行為が初夏の汗を落とすためのものだと思いたい。優しいが、デリカシーのない女だ。何を言いつつ分かったものではない。そして何を言われても、少なくとも自分は今日、そんな気分には更々なれなかった。

「本当に家族は大丈夫なのか」

先ほど電話口から聞こえた怯えは余りにも痛ましく、久しぶりに妻へ情性以外の愛情が湧いた。今度はマーカスも、あやふやではあったが首を縦に振った。

「俺の経験ではね。実家に帰ったんなら、まず問題ない」

「で、俺達は」

気づけば指先まで来ていた炎。煙草はおろか、着替えも金も無い。エセルに頼み込めば、幾らでも逗留を許してくれるだろう。そもそもギャングたちがこの場所を嗅ぎつけるとは思えない。それにも関わらず、今まで盲信してきた第六感が鎮まることはない。

「分からないな」

マーカスの手がテーブルのブランデーに伸びたのは、少なくとも初めてではない。啞え煙草のままカップに口を付けようとして、顔を顰める。リーもその様子を一部始終目撃しながら、違和感すら覚えなかった。

灰が落ちて火事にでもなっていたら、お互いもう少し冷静になることが出来るだろうか。

「何食わぬ顔でラジオ局に？」

週に一度、夜九時からの番組は生放送で、アパラチア山脈に阻まれていない全ての場所に電波が飛ぶ。よりによってこんな時に。リーは顔を顰めた。

「まだ間に合うだろう」

「今からだと？ 俺は行かないぞ」

灰が落ちるほど乱暴に手を振り、マーカスは悲鳴を上げた。

「たとえ一万人の警察官が護衛についたって、今日は休む」

「それじゃあ電話するか。理由は何だ」

「扁桃腺を腫らしたとでも。適当に言っておけば良いさ」

「俺が？」

「そっちのほうの説得力があるよ、キッド。それよか、アーサーはどうだ」

今度はリーが首を横に振る番だった。

「酔いつぶれてるんだろう。連絡がとれない」

形ばかりのエージェントなど最初から当てにはしていない。どうせ契約は再来月までだった。シナトラ級とは言わないが、せめても

う少しまともな人間を雇わなければ、本当に自分のしつぽを追いかける犬の如く、州内をぐるぐる回るだけで一生が終わりかねない。

「もう一度会えたら、クビだ」

シャワーの音が止まる。今からたっぷり一時間、エセルはバスタブの中でその身をコンポートにしてしまうつもりだろう。ローブを羽織って出てきた彼女の体臭を知っている身としては、物悲しい。ぼつてりと湿った真つ赤な唇、湯気を立てる張った脹脛。お預けにされたホースラディツシユと冷蔵庫のポークソテー。女主人の名誉のために言っておけば、これらは全て、魅力あるものなのだ。ただし、今は気力が無い。ソファに身を凭せ脚を投げ出していれば、脱力した部分を舐めるように疲労が這い上がってくる。

「コロンボ、病気だったってな」

カップと煙草、どちらを先に手放すかと思っていたが、予想通りマーカスは短くなつた煙草を溢れかえりそうな灰皿に押し込んだ。

「周りから疎まれてたって」

「確かにちよつと飛んでたが、あつちの世界の奴はみんなあんなもんだと思つてた」

「あつちの世界でもまともじゃなかつたって訳だ」

こつこつと踵で板張りの床を叩く音が、言いよどむ間を何とか繋ぎとめる。在りし日のコロンボ、ふつくらとした面立ちとハイな口調。派手なことが大好きで、目立ちたがり。ミートボール・スパゲティを食べながら、平気で刻んだ死体の話をする。それがリーが知っているコロンボの姿だった。何がまともか、まともではないか、知らないままでもいたかった。まだ現実と上手く分離することのできない営業用の無邪気さが、頭の奥で呟いている。知らない、分からない。思つたよりも気疲れしている。少し眠れば頭もすつきりするだろうか。

「梅毒は怖いな」

辛いニコチンの味を舌先で転がすことで、何とか眠りを追い払おうとする。結局は無駄な努力で、ゆっくり膜を張る耳は、マーカス

の声を火星から受信しているかのような場違いさに仕立て上げた。

「どんなに利口な奴でも、おかしくさせる」

「俺達の知ったこつちゃないさ」

「なあ。あいつ、俺達といるとき、厄介なこと言ってなかったか。人が死んだり、警察が喜ぶような話」

「いちいち覚えてない」

とめることのできなかったあくびを真上に打ち上げ、リーは目を瞬かせた。

「人を殺すときはナイフを使うのが好きか、斧を使うのが好きか、そんな話は聞き飽きた」

「なんてこつた」

いつの間にか隣に戻っていた身体が、乱暴な勢いでソファへ落下してくる。まだ涙の滲む眼に映るマーカスは、綺麗に撫で付けてあった髪をくしゃくしゃに乱し、顔を手で覆っている。

「『沈黙の掟』なんて言葉は死語なのかな」

「詳しいな」

さすが、と瞼を落としかければ、重苦しい溜息に後ろ髪を引かれる。

「俺達、本当に殺されるかも知れない。アイスピックで刺されて、車のトランクに」

Reallyのrを強く発音するイタリアーノ特有の癖を隠せないほど、その声は憔悴している。早口の呟きは子守唄に近いが、これほどまでに内容が物騒では、恐らく安眠は怖気を奮って逃げていく。

リーの意識が沈んでいくことなどお構いなしで、マーカスは取りとめもない言葉を延々と垂れ流し続けていた。

「せっかく好きなことが出来るようになったっていうのに、また逆戻りなんて」

「逆戻り？」

薄眼を開けて尋ねた口調に何かの悪意を含んだつもりは全くない。

それなのに声が飛び出た途端、今まで不明瞭ながらも垂れ流されていた言葉は、見えない壁で遮断されたかのようにぱったりと止んでしまった。

「マーク？」

突如広がった沈黙は、理由の分からない不安を大量に孕んでいる。

当惑し、今度はしつかりと瞼を持ち上げて呼んでみたが、声はだだっ広い空間に溶けるばかりで、確たる手ごたえを与えてはくれない。「元には戻れないな」

やがてマーカスは、静かに呟いた。厚手の唇以外は、身じろぎ一つもない。眼は正面を睨みつけているようにも、放心しているようにも見えた。膝の上に囲い込まれたブランドーの瓶も、この時ばかりはすっかり忘れ去られているらしい。虚しく小さな音を立てるばかりで、先ほど点した照明へ応える反射もどこか鈍い。

「貧乏はごめん、そうだろう？」

リーは知らずと、辛気臭い横顔をまじまじと見つめてしまった。またもや知らない顔。いや、これは知っていると思いついていた顔だった。

よくよく考えなくとも、リーはマーカスの過去をそれほど詳しく知っているわけではなかった。両親に連れられナポリからやってきたのは5歳のとき。歌手を志したのは10年前、紆余曲折。憧れの人物はビング・クロスビー。8年前に結婚した、市役所に行った2カ月後に生まれたのは女の子。そんなところだろうか。あとは、お互いニューヨークのクラブで解雇寸前だった4年前、千鳥足のマーカスがプロポーズして以来。アボットとコストロを見るよ、セックトで売ればみんな買うんだ。この眼で見えてきたことばかりだ。見えないものは分からない。四六時中一緒にいるにも関わらず、リーはマーカスの本名さえ知らないのだ。

マーカス・ジョンストンというステージネームの裏に何があるか。今まで全く気にせず過ごしてきた。浮かび上がる苦悩もばやきも全ては視界に直結する。視界にさえ入ったら、励ましたり、慰めたり

することなど幾らでも出来た。けれど今、リーはとてつもない戸惑いと不安が心を満たすのを感じていた。

リーがマーカスを知らないように、マーカスもリーの本名を知らない。頑是無い苛立ちのうち、慰撫できるのは上っ面だけ。

頭が痺れる。酒が欲しい。疲れ過ぎて、疲れていると一蹴できない。

誘惑に駆られ、マーカスの膝で輝くボトルに手を伸ばそうとした瞬間、耳を劈くようなベルの音が窓ガラスを震わせる。床の上に鎮座した受話器をひったくるようにして掴んだ。

「はあい？」

咄嗟に、エセルの声真似をしていた。異星人でも見るような顔で、マーカスが眼を見開いている。

「ミセス・グラッドストーン？」

「もうミスよ」

あざとさに辟易するくらい鼻声を利かせる。伊達に芸を磨いてきたわけではない。カウンターテナーのファルセットでなおかつ電話という武器を使えば、四月一日のイタズラには十分事足りた。事実、眼の前のマーカスですら一度は騙され、受話器の向こうから歯が浮くような口説き文句を言い放ったことがあるのだ。

「どなたかしら。マーク？」

「マーク・ジョンストンは今いないんで？」

聞き覚えのない声は強烈なイタリアの訛りを持っており、息を詰めるようにして尋ねてくる。喉が引き攣りそうになったが、膝を握り締めることで辛うじて言葉を継いだ。

「今頃うちじゃないかしら」

「いないんで」

「なら仕事ね」

「リー・デネットも」

「知らないわ」

「行き先をご存知ない？」

「私、あの二人の母親じゃないのよ」

乱暴に切られた後、無感動に響く発信音は、その一つ一つが心臓を刺し貫いた。

「バレたのか」

「俺の経験上ね、こういう電話が掛かってきたとき、奴ら確認するためにこつちへ向かってるところなんだ」

言いながらも、既にマーカスは立ち上がってジャケットを掴んでいる。半分以上減ったブランドーを、その中にくるみこんでしまった。

「ここ、3階だろう。追いつめられて窓から飛び降りても、せいぜい複雑骨折するくらいで、とてもじゃないが安らかに死ねない高さだ」

いつもは笑える洒落た口調の冗談は、寒気を催させるだけに終わる。まだ口元を強張らせたまま、リーも腰を上げた。肝は竦みあがったままだが、頭で懸命に叱咤することで、何とか脚は動いてくれる。

「さよならは言わないほうがいいな。彼女、半狂乱になる」

マーカスが無理して微笑んでいると分かれば、痛みは同じだけやってくる。

キッチンを通り抜ければ、鼻歌はより鮮明にその歌詞を伝える。

「ペーパームーン」だった。紙のお月様、ボール紙の海。どれも本物になる、ただ信じさえすれば！ 若干音程を外していたし、歌詞は悲壮で陳腐だったが、心にすんと落ちてきた。マーカスは一瞬だけ、音源に視線を投げかけた。

テーブルの上には、山盛りのサラダが寂しく鎮座している。タマネギのスライスを蹴落として、上に乗った真っ赤なラディッシュを一つ口に放り込んでから、リーは出来るだけ音を立てないように扉を閉めた。

4・たまねぎ

小さい頃は、騒がしい場所でないと思えなかった。タップを踊ればそのまま踏み抜いてしまいそうなポロポロの舞台。ボードヴィリアンの父親が流行り唄を口にすれば、母親は後ろで壊れかけたオルガンを弾く。

素っ頓狂な楽器の音と歌声、割れんばかりの拍手に甲高い野次。繕いの跡ばかり目立つカーテンでは、とても遮れるものではない。5歳で踏んだ初舞台のとき、初めてそれが面白さと同時に恐ろしさを持つことを知ったが、少なくともリーの人生の最初期において、喧騒とは純粹に愉快なものであった。汚い控え室にまで駆け込んでくる音は毛布の上から更に身体を包み、遊び疲れた身体を安らかな眠りへと誘ってくれた。

そのまま父の腕に抱かれて家に戻り、朝まで目覚めなければよい。だが、ベッドに入れられる動作が少しでも乱暴だったり、昼寝をしすぎて端から眼が冴えていようものなら取り返しがつかない。日当たりの悪い部屋は夏でも涼しく、冬は耐え難いほど寒く、隅の方で蹲った黒さが地獄へ続く底なしの穴のように思えた。そんな晩に限って、外は犬の鳴き声一つ聞こえない。どれほど強く上掛けを手繰り寄せても、きいん、と耳に痛みを与える沈黙が、押しつぶさんばかりの勢いで迫ってくる。

青白い空気を跳ね返すためにリーが思いついたことといえば、知っている限りの歌をその中に響かせるということくらいのものであった。先ほどの舞台上で父親が歌っていた小唄、巷で流行の艶笑歌。喉が渴いて声が出なくなる頃には、大抵喉が重くなる。それでも駄目な時は、先ほどの唄の振り付けを考え、チャップリンと踊る。メアリー・ピックフォードを助けにダグラス・フェアバンクスと共に荒野を駆ける。ニッケルオデオンこそ廃れていたが、まだ近所の映画館は設備も外装も整っておらず、子供がこっそりと潜り込める金網

の隙間などたくさんあった。

「俺は今まで、悪いこともたくさんしてきたけどね」

「サーベルを振り回すリー」の耳に、声が降り注ぐ。

「女の財布から金をくすねたことは一度もなかったんだ」

「うんうん、と声だけで返事をしているこれが夢かどうか。全身を揺らす空っぽの貨物列車。」

「怒ってるかな」

「ああ、ああ」

「ダッシュボードを蹴飛ばしながら、リーは唸った。」

「そんな奴、身を滅ぼせばいいよ」

腹立ち紛れに窓を叩けば、見えない顔は悲しげな表情を浮かべて俯いた。気にしている余裕もない。何もかも忘れて没頭したかった。でないとピックアップが生贄にされてしまう。

「おまえ、あとで電話しといてくれよ」

「持ってきたのはお前だろう」

「使ったのは二人だ」

うるさい。静かにして欲しい。でないと眠れない。

違和感に眼を開けた先にあるのが全く知らない景色だったので、思わず身体を強張らせる。視界一杯に広がる灰色の壁は左半分が白み始めており、その上を時おり消し炭色の影が高速で滑っていく。

長時間不自由な姿勢でいたため、身体の節々が痛む。車の中で眠ったのなど久しぶりの話だった。州外へ派遣されたとき、安いとはいえ一応モーターを手配されるような身分になって二年ほど経つ。

それまでは夜行列車の座席で縮こまることなど当たり前の話だった。あの時は、何時間同じ格好で眠っていても疲れ一つ感じず、すつきりと眼を覚ますことができた。歳月の残酷さに慄然とする前に、背を逸らせて伸びをすれば、後部座席に転がった瓶が眼に入る。寝覚めが悪いのも当たり前だ。ほっとする。

昨晚エセルのアパートを抜け出した後、二人はジムビームと名前も知らないようなメーカーのスコッチ、それにマーカスが持ち出したブランデーを抱え、高架下に向かった。ごみと生活排水がカーキ色の渦を巻くその場所は、ルンペンすら近寄らない場所として有名だった。曰く、この近所に住む取り上げ婆が赤ん坊を捨てるため、夜中に訪れる。幸いリーが夜目を凝らして発見したのは野良猫の死体だったが、そうでなくとも事故でボンネットが潰れた車やゴミがそこかしこに散らばり、居心地のいい場所とはいえなかった。

気候の良い時期でよかったと呟きながら、一番綺麗な車に入り込んだのが日付を回る直前。その後は、なけなしの鋭気を奮い起こすためと無理にでも意識をなくすための自棄酒と愚痴のオンパレード。いつ眠ったかは覚えていない。それでもアルコールの力は偉大で、多少の気だるさに眼を瞑れば、銃をもった男が近付いてきたとき走って逃げる元氣くらいは十分に残っていた。

恐らく自分より先に潰れてはいなかったマーカスは、まだスコッチとレム睡眠の海を泳いでいるらしい。ハンドルへ抱きつくようにして眠りこけている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4710k/>

インザミネストローネ

2010年10月9日14時57分発行